国立国語研究所学術情報リポジトリ

国語研の窓 第30号 (2007年1月1日発行)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001931

国語研の窓 30号

平成19年１月１日　第30号　発行　独立行政法人国立国語研究所
Independent Administrative Institution: The National Institute for Japanese Language

編集　国立国語研究所管理部総務課
普及広報担当グループ
〒190-8561 東京都立川市緑町10番地の２
電話 042-540-4300　FAX 042-540-4334
URL http://www.kokken.go.jp/

上空から見た国語研究所
左上（南）は自治大学校。右（北）には文部科学省の研究機関が移転予定。

もくじ

暮らしに生きることば　1
研究室から：行政情報処理と漢字　2
解説：現在の図書館，これからの図書館　4
解説：国語研究所での研究資料の保存と活用　5
刊行物紹介　6
ことばＱ＆Ａ　7
公開研究発表会報告　7
新刊　7
お知らせ：「ことば」フォーラム　8

暮らしに生きることば

「方言かるた」

お正月の伝統的な遊びのひとつ，かるた。百人一首やいろはことわざかるた，地元の名所・名産・出身者を題材にした郷土かるたなどいろいろありますが，「方言かるた」も各地で盛んに作られています。

『津軽弁カルタ』『いろはにほへとっとり方言 かるたでつづるとっとり言葉』『播州弁かるた』『八女市方言かるた』『全国方言カルタ』など各地のものが見つかりました。北から順にいくつかあげてみましょう。

おっちゃんこしてるおんちゃん。ちゃんこかったのに，おがったねえ。（座っている弟。小さかったのに，大きくなったねえ。）『北海道かるた 方言編』

けっけのけで遊びの番こ決め（じゃんけんぽんで遊びの順番を決める）『利尻の方言かるた』

なんともねと隣からもらった赤ままー（ありがとうと言って隣からもらった赤飯）『越前勝山方言いろはかるた』

ちょかで いちびり おっちょこちょい（軽率で落ち着きがなく，調子に乗って騒ぐ，早とちりな人）『なにわいろはかるた』

らりくちゃになっちゅーけんど怒られん（とりちらかしているけれど怒ってはだめ）『土佐弁かるた』

方言かるたには，人々の方言に対する思い入れと遊び心を感じ取ることができます。また，古くから地元に伝わってきた方言を守ろう，残そう，といった心情もくみとれます。

伝統的な方言が急速に変化し，失われていく中，生活のことばである方言への関心や評価，社会における方言の位置づけも変わってきました。かつては，方言をなくそうという動きもありましたが，現在では，方言はひとつの「文化財」と考えられています。

また，土産物としての方言グッズや，最近の方言ブームなど，方言は，「商品」としての方言，「娯楽」としての方言，といった側面も見せています。

方言を取り巻く状況の変化を背景として，方言が現代社会の中でどのような働きをしているのかを多方面からとらえ，生活の中での方言についての意識の変遷を見つめていきたいと思います。

（井上 文子）

研究室から

行政情報処理と漢字

1. 汎用電子情報交換環境整備プログラム

みなさんは，「電子政府」や「電子自治体」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。現在，府省庁や地方自治体など全国の行政機関では，さまざまな手続きに使う文書の電算化が進められ，インターネットを利用した電子申請のシステムが整備されつつあります。コンピュータを使って円滑な情報交換ができるような「電子政府」を実現するためには，住民の氏名や住所，あるいは，法人の名称や所在地などを記載するために必要な漢字についても，「電子政府」を支える基盤の一つとして整備をしていく必要があります。

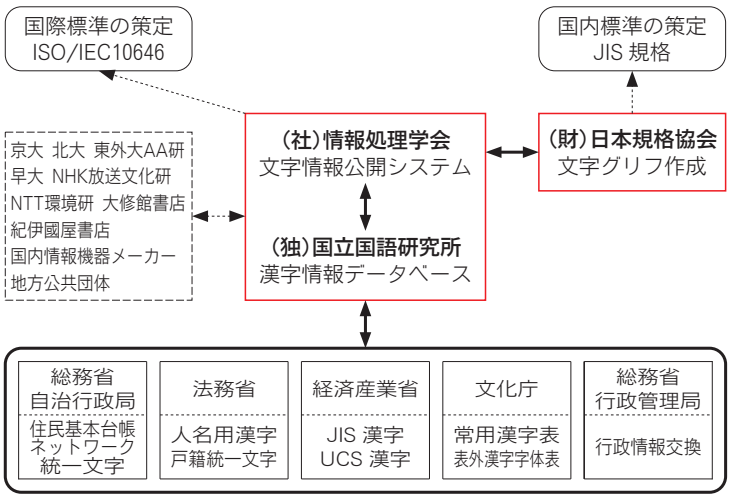


図 1　プロジェクトの推進体制

例えば，戸籍や住民基本台帳で使われている人名・地名を書き表すための漢字には，漢和辞典にも載っておらず，コンピュータ間でのやり取りのできないものが少なくありません。そこで，国立国語研究所と情報処理学会と日本規格協会の 3 機関が中心となり，「電子政府」で必要となる漢字の調査研究を，平成14年度から17年度までの 4 年間，経済産業省の委託研究として進めてきました。

国立国語研究所は文字の同定などの基礎研究にあたる文字情報の整理・体系化，情報処理学会は整理・体系化を経た文字情報を集積するデータベースの構築と運営，日本規格協会は統一的なデザインによる新たな文字グリフ（平成明朝体）の制作をそれぞれ担当しました。また，この事業は正式名称を「汎用電子情報交換環境整備プログラム」と言い，内閣官房・総務省・法務省・文化庁が協力した「5 府省庁横断プロジェクト」であり，出版・印刷・情報機器などの実業界からも応援を得て行われました。

2. 漢字情報データベース

平成14年度から17年度までの調査研究では，法務省の「戸籍統一文字」約50,000字と総務省の「住民基本台帳ネットワーク統一文字」（以下「住基統一文字」）約20,000字を集め，ひとつひとつの文字に対して，部首・画数・読みなどの基本情報，国語施策（常用漢字など）や戸籍行政（人名用漢字など）

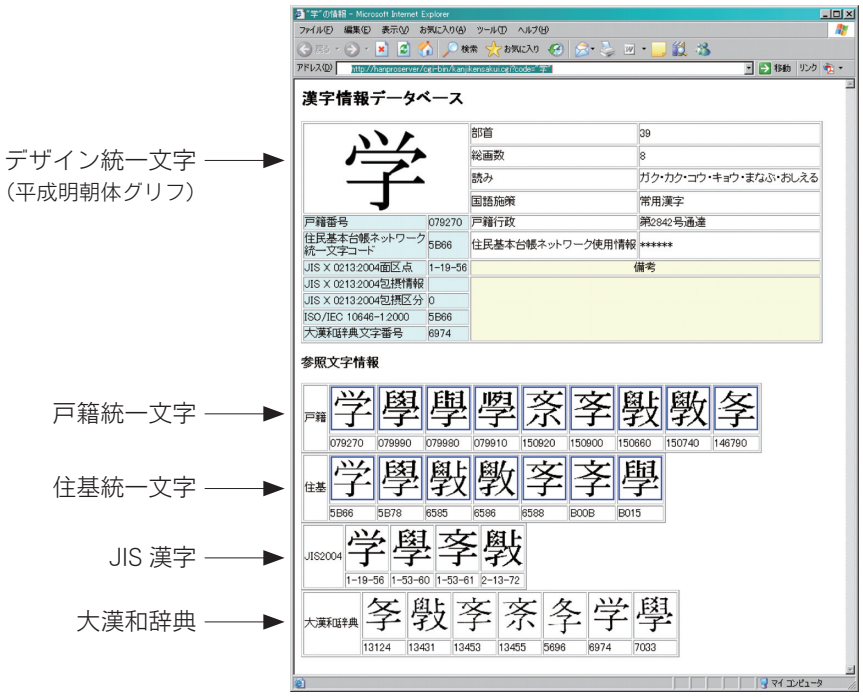


図 2　漢字情報データベースの検索例

に関する行政の文字情報，コンピュータで漢字を扱うための JIS 規格（国内規格）や UCS 規格（国際規格）の文字コード情報，大漢和辞典文字番号などの辞書情報を付与し，調査結果を漢字情報データベースとして蓄積しました。

図 2 は，漢字情報データベースで「学」を検索した結果です。日常的によく使われている「学」のほかに旧字体の「學」など，戸籍や住民基本台帳では多くの異体字が必要とされています。漢字情報データベースはこのような異体字も多数収録し，全体の字種は異なり約59,000字となっています。

漢字情報データベースは，行政の漢字処理の基盤としてだけでなく，文献の解読や漢字使用頻度調査，漢字の認知科学など，漢字に関わるさまざまな学術分野での活用が期待されています。

3. 漢和辞典にない文字

住基統一文字約20,000字と，国内最大の漢和辞典である『大漢和辞典』（諸橋轍次，大修館書店）の親字約50,000字とを照合してみると，住基統一文字のうち約2,000字は，『大漢和辞典』に載っていない文字だということがわかります。

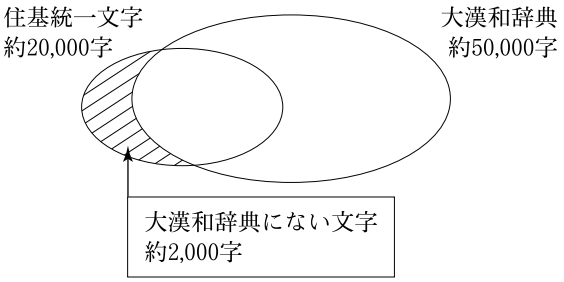


図 3　住基統一文字と『大漢和辞典』

では，『大漢和辞典』に載っていない文字にはどのようなものがあるのでしょうか。

例えば，山梨県の地名「大垈（おおぬた）」や「藤垈（ふじぬた）」に使われる「垈」は，山梨県地方特有の「地域文字」です。「ぬた」は湿地を表わすとされています。ところが，「垈」と同字形の文字を，韓国ソウル市の地下鉄の駅名に見ることができます。韓国語で「垈（대）」は土地や宅地を表わし，韓国の古文献にもこの意味で使われています。

山梨県の「垈（ぬた）」と韓国の「垈（대）」とでは，文字が表わしている意味が異なります。それに，日本国内で「垈」を現在使う地域は山梨県しかなく，過去にさかのぼって，歴史的な文献や考古学的な遺物からも，「垈」はまだ見つかっていません。つまり，朝鮮半島から「垈」が伝えられた痕跡が見出せないのです。現状では，山梨県の「垈（ぬた）」と韓国の「垈（대）」とは同形異字，すなわち，互いに関連性のない他人の空似としておくほかないようです。

図 4　山梨県甲斐市「大垈」

図 5　ソウル市地下鉄「落星垈」駅

このように，『大漢和辞典』に載っていない文字には，ある特定の地域や場所を書きあらわすための文字が含まれています。その地域や場所に無関係の人にとっては，見たこともない珍しい文字になります。しかし，その地域や場所に深く関わる人にとっては，日常的な文字であり必要な文字です。「電子政府」や「電子自治体」を実現するためには，文字の流通度に関わりなく，必要な文字を行政情報処理の場で扱うことができるようにしなくてはなりません。

4. 平成18年度以降の展開

「汎用電子情報交換環境整備プログラム」は平成18年度以降も継続となり，今度は不動産登記や法人登記など，登記事務で使われる文字を検討することになりました。図 6 に登記文字のごく一部を示します。左から「華」「鄭」「龍」の中国簡体字です。

図 6　登記文字

国際化の時代を迎え，日本に仕事や居住の場をもつ外国人も増え，文字使用にもその影響が現われている事例です。行政情報処理の実務では，日本で使われている漢字だけを扱っていては間に合わなくなりました。「電子政府」の基盤を支える文字の調査研究でも，東アジア漢字文化圏を視野に，調査研究を進めていくことが必要です。

（高田 智和）

解　説

現在の図書館，これからの図書館

国語研究所は，唯一の国立の国語研究機関として，日本語に関する情報資料の継続的な収集・整理という大事な役目も担っています。そこで，研究所では保有する図書や資料の特性に応じて，適切な保存や利用ができるように，図書館と資料庫（→次ページ）を統合的に管理し，整備を進めています。

日本語の専門図書館として

国語研究所図書館は，現代日本語についての研究文献・言語資料を中心に，日本語学・言語学・日本語教育，及び，民俗学・社会学・心理学・教育学といった日本語に関わる関連領域についても，網羅的に文献・資料を収集しています。

所蔵資料数（平成18年３月31日現在）

図　書	和図書	洋図書	計
	87,184冊	16,659冊	103,843冊
雑　誌	和雑誌	洋雑誌	計
	4,082種	441種	4,523種
視聴覚資料など			2,459点

中には，東条文庫（方言），大田文庫（方言），保科文庫（言語問題），見坊文庫（辞書），カナモジカイ文庫（文字・表記），藤村文庫（音声科学）など，研究者から寄贈された貴重なものもあります。

また，図書館が収集した文献・資料をもとに，『国語年鑑』『日本語教育年鑑』（→６ページ）の日本語・日本語教育に関する文献目録を作成しており，これらは調査研究における基本文献となっています。

平成17年の立川移転を機に，「全国で唯一の，日本語に関する専門図書館」として，所有する研究文献・言語資料の一般公開を本格的に実施しています。

蔵書目録データベース

図書館が所蔵している図書・雑誌の書誌情報・所蔵情報は，研究所のホームページから「図書館蔵書目録データベース」により簡単に検索できます。

http://www.kokken.go.jp/tosyo_kensaku

また，国立情報学研究所の目録所在情報サービスに参加していますので，同研究所の「総合目録データベース WWW 検索サービス（NACSIS Webcat）」からでも図書館の図書・雑誌の検索が可能です。

http://webcat.nii.ac.jp/

文献複写サービス

国語研究所は，国立情報学研究所の図書館間文献複写サービス（NACSIS-ILL）に参加しています。

所蔵する文献・資料の複写を御希望の方は，所属機関の図書館を通して，申し込むことができます。

電子化報告書

昭和23年の創立以来の調査研究の成果や，蓄積してきた日本語の情報・資料を継続的・組織的に整理し，電子化してインターネット上で公開することに取り組んでいます。

例えば，蔵書目録データベースで研究所の報告書を検索すると，電子化されたページの画像を閲覧できる機能があります。今後はこのような電子図書館的機能をさらに充実させていく計画です。

日本語の情報資料館をめざして

研究所の調査研究の成果や蓄積してきた情報資料を組織的に整備し将来に残すと同時に，いっそうの活用を図るため，資料保存と情報発信の拠点となるような，日本語の情報資料館をめざしています。

図書館利用案内

開 館 日：月曜日～金曜日
（毎月最終金曜日，祝日，年末年始は休館）
開館時間：９時～17時
連 絡 先：独立行政法人 国立国語研究所 図書館
TEL：042-540-4640
FAX：042-540-4339
E-mail：tosyokan@kokken.go.jp
URL：http://www.kokken.go.jp/tosyo

（熊谷 康雄・井上 文子）

解　説

国語研究所での研究資料の保存と活用

はじめに

言葉は生きもの。日々，変化します。ある瞬間，ある場所で使われた言葉を記録した資料は，後から時代をさかのぼって作ることのできない，貴重なものです。

国語研究所では共同研究体制をとっているため，ひとつの研究テーマに複数の研究員が携わることになります。そのため，資料は研究所全体の共有のものという意識が生まれやすかったといえます。平成17年の立川新庁舎への移転を機に，創立以来60年近くにわたって蓄積した研究資料を集中管理するための「中央資料庫」が設置され，改めて研究資料の保存・活用をはかる体制が整いました。ここでは，その取り組みについて御紹介します。

様々な資料のかたち

言葉の研究のために作られる資料の形は多様です。一番多いものは紙の資料です。様々な目的で言葉の使われ方を調べた調査票（アンケートやテストなど）や，データを整理するために使っていた用例カードなど，国語研究所ならではの大規模な調査を行う過程で，大量の紙の資料が生み出されます。一般的なダンボール箱に換算すると，すでに2,500箱を超える分量です。

同時に，言葉の研究に欠かせない録音・録画資料もたくさんあります。カセットテープや VHS ビデオ，オープンリールの録音テープはもちろん，一般にはあまり普及しないままに消えていった媒体も残されています。

また，国語研究所では昭和41年という非常に早い時期に大型電子計算機を導入して以来，計算機を使用した分析を多く行ってきました。その結果，大型電子計算機やワークステーション時代の磁気テープも数多く残されています。誰もが手元で電子データを扱う時代になってからの，色々なサイズのフロッピーディスク，CD-R，DVD などもたくさんあることは言うまでもありません。

このほかに，実験器具類もあります。音声を分析する機械，本を読むときの目の動きを追う機械，発音するときの口の中の動きを記録する機械など。

資料のかたちの多様性は，そのまま研究の視点の多様性を示しています。

資料保存の流れ

現在，各研究プロジェクトは，そのプロジェクトが完了したら，そこで生み出された資料を資料庫にまとめて移管することになっています。研究に携わってきた研究員は，資料を研究テーマごとにまとめ，規定の保存箱に入れ，研究の内容と箱の中身について記入した移管票を添えて，資料庫担当に渡します。資料庫担当では受け取った移管資料を燻蒸（くんじょう）し，配架します。

資料庫には，紙資料保存用とメディア類保存用との 2 室あります。それぞれの資料に合った容器に入れ，庫内環境を整えて保存しています。

資料活用のための手立て

60年分の資料の山の中から必要な資料を探し出すためには，検索手段となる目録が必要になります。資料の目録を作成することを資料記述といいますが，国語研究所では，資料記述の国際標準となっている XML のタグ形式を採用した「資料情報検索システム」を開発しました。現在，研究テーマ単位の記述を順次公開しています（http://ead.kokken.go.jp/）。

今後の課題

資料保存・活用の取り組みを進めていくと，様々な問題に直面します。例えば，資料の素材が劣化してしまうこと，電子データが読み取れなくなること，あるいは，個人情報が盛り込まれているために調査票の再活用に困難が生じてしまうこと，など。

こうした課題に直面した経験をふまえ，資料庫担当では積極的に「のちのち問題が発生しないためのアイディア」を出し，所員と共有したいと考えています。資料を作成する段階でほんの少し気を付けるだけで，資料の保存・活用の可能性がぐんと広がります。「今」しか作れない「今」を映す言葉の資料を，可能な限りいい形で残していきたいと考えています。

（森本　祥子）

刊　行　物　紹　介

『国語年鑑2006年版』

昭和29年の創刊以来，半世紀以上にわたって，日本語の研究情報に関する基礎的な文献として重用されてきた『国語年鑑』の2006年版を，このほど刊行しました。

○**第１部「動向」**…第２部を資料とした文献の動向，及び本研究所の「ことばに関する新聞記事見出しデータベース」を資料とした社会における動向について，分析を行いました。「刊行図書の動向」では，過去10年間に刊行された図書について，分野別の全体比の推移に注目し，動向の概観と変化の傾向の分析を行いました。「雑誌文献の動向」では，同様に過去10年間の概観と分析を行うとともに，統計的手法による今後の動向の予測という新たな試みも行いました。

○**第２部「文献」**…2005年１月から12月の間に発表されたものを中心として，日本語に関する図書や，雑誌に掲載された文献，そして日本語に関する内容を含んだ総合月刊誌の特集・連載・対談を，それぞれ目録の形で一覧できるようにまとめました。図書（1,173件）と雑誌文献（4,418件）については，利用しやすいよう分野別に掲げています。加えて，図書・雑誌・総合月刊誌の発行所のデータも掲載しました。

○**第３部「名簿」**…日本語にかかわりの深い個人や学会・団体等の情報を掲載しています。

○**付録 CD-ROM**…第２部のうち「刊行図書」「雑誌文献」のデータを，PDF ファイルとテキストファイルの２種類の形式で収めました。

＊御購入に関するお問い合わせ先：大日本図書（電話03-3561-8679）
＊『国語年鑑』のホームページ：http://www.kokken.go.jp/katsudo/kanko/nenkan.html

『日本語教育年鑑2006年版』

『日本語教育年鑑』は国内外の日本語教育の状況や研究動向についての情報を提供し，情報交流の基盤となることを目指しています。本年版から各種情報は国立国語研究所ホームページへの掲載を主とし，本書は特集を中心とした構成になっています。

○**第１章　特集「日本語教師の実践能力の育成・評価に関する再検討」**

日本語教師に求められる実践能力とは何か，測定・評価はどのように行うことができるのか，これを育成するにはどうしたらよいかについて様々な面から検討しています。

○**第２章　「日本語教育の動向（2005年度）」**

例年通り日本語教育関係機関・団体・省庁の年度活動報告を掲載しています。本号ではさらに，「国際交流基金 海外日本語教育機関調査」を取り上げました。1970年代から2003年調査までの海外での日本語教育の状況・特徴が解説されています。

○**第３章　「資料」**

2004年４月から2005年３月の間に発行された日本語教育関係論文の書誌情報と，日本語教育関係の平成17年度文部科学省科学研究費補助金採択課題を掲載しています。これらは，ホームページで検索ができます。その他各種情報の入手先についても掲載しています。

＊御購入に関するお問い合わせ先：くろしお出版（電話 03-5684-3389）
＊日本語教育年鑑ホームページ：http://www.kokken.go.jp/nshiryou/

ことばQ&A

※この欄は，当研究所に実際に寄せられた「ことば」に関する質問に基づいています。

質問　「お」や「御（ゴ）」を何につければよいか迷います。判断基準はあるのでしょうか。

回答　美称や美化語の和語「お」や漢語「ゴ」について，たとえば，「お電話」を「御（ゴ）電話」としてよいか，という質問があります。「電話」は漢字の音読み（字音語）なので，語種をそろえると「御（ゴ）電話」となります。しかし具体的な物の名で，身近でありふれた「電話」は字音語でも「御（ゴ・ギョ）」をつけず，普通の和語「お」がつきます。普段より丁寧に畏まって「御（ゴ）電話」とする場面も想像はされますが，聞きづらい，聞いたこともない，という人がいると考えると，話し言葉では通常の言い方の「お電話」に越したことはないでしょう。

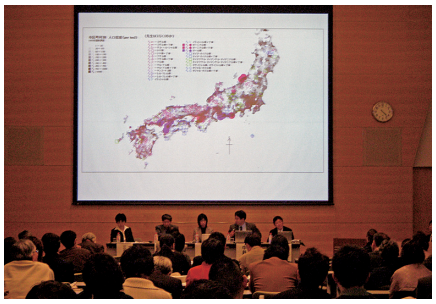
また，「おマンション」や「御（ゴ）邸宅」は間違いか，と問われます。「おマンション」は，「おビール」と同じように外来語に和語「お」を冠しています。そもそも外国語や外来語には日本語の接頭語が目立ちますし，違和感も大きいでしょう。不動産や住宅関連の専門的な特殊効果があるかもしれません。ただし，言われた相手の気持が和んで商談が進めばよいでしょうが，その言葉だけが，とってつけたように響き，かえって誠実な対応を感じさせない，という恐れがあります。また「御（ゴ）邸宅」についても，そもそも話し言葉では「邸宅」より「お宅」や「お住まい」のほうが普通です。「邸宅」をさらに褒め言葉として使おうという無理があります。過剰な表現はかえって逆効果にもなりかねません。さらに「業界ではこう言う」と無批判に言い習わしとすることにも，疑問があります。

明らかに座りのよくない表現（たとえば今回の「おマンション」）が，一挙に広まって一般に定着することは，まずありえないと思われます。一方で，今までとは違った言い方が徐々に定着したり，気付かないうちに違和感なく受け入れられたりする，といった変化は，ないとは限りません。現に，従来文章や改まった場面で「御（ゴ）家族（様）」と使われていたものが，最近口頭で「お家族の方々」と呼ばれる場面があるそうです。

敬意表現には，是非を示唆する規範や標準のないことも多いですが，少なくとも今までの言葉の伝統に外れていないか，現代社会に違和感なく受け入れられるか，を一つ一つ考えることが必要です。時には，美化や美称そのものが本当に必要かどうか，たちもどってみることもです。

（山田　貞雄）

公開研究発表会報告



『方言文法の全国分布と全国方言調査の将来像』をテーマとする平成18年度公開研究発表会は，12月16日（土）午後，国語研究所で開催されました。参加者は154名。

第１部のシンポジウムでは，『方言文法全国地図』全６巻をめぐって，４人のパネリストによる発表がありました。調査開始時の企画者である佐藤亮一氏による「作成の経緯と意義について」，日高水穂氏（秋田大学）「文法化の事例を示して」，中井精一氏（富山大学）「評価と今後の課題」，編集担当者の大西拓一郎による「方言分布の解明」の４つの報告です。報告を受けて，後半は，司会の三井はるみがパネリストとともに，参加者からの質問を盛り込みながらディスカッションをすすめ，方言調査の将来像も視野に入れた討論が活発に交わされました。

第２部のポスター発表では，所内外の研究者による７件の発表がありました。参加者との間で熱心な質疑応答が交わされ，会場は熱い雰囲気の中で閉会しました。

新　　刊

『国語年鑑2006年版』

2006年11月／大日本図書／冊子（A5判横組み665ページ），CD-ROM／税込8,085円

『日本語教育年鑑2006年版』

2006年12月／くろしお出版／A5判横組み335ページ／税込4,200円

「ことば」フォーラム

「外来語と外国語」をテーマに２回の「ことば」フォーラムを開催します。
私たちが毎日見聞きしているマスメディアで使用される外来語と外国語の現在の状況を展望し，そのような状況が生まれた原因とその問題点について考えていきます。

第30回「日本語の中の外来語と外国語 ～ 新聞，雑誌，テレビ」

新聞とテレビの現場からお二人をお迎えして，マスメディアにおける現状と問題点を話し合います。

日　時：2007年２月24日（土）
午後１時30分（１時開場）～４時30分
場　所：国立国語研究所・講堂（定員180名）
後　援：朝日新聞社，NHK放送文化研究所，立川市

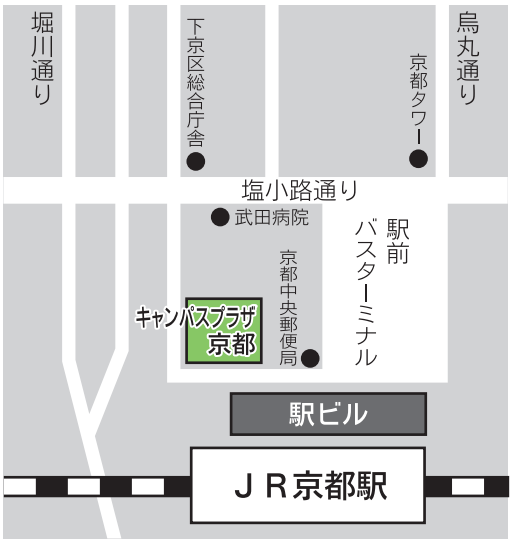
「新聞記事の外来語」
福田　亮（朝日新聞社）
「雑誌に見られる外来語と外国語」
伊藤雅光（国立国語研究所）
「テレビ・ラジオにおける外来語の過去と現在」
塩田雄大（NHK放送文化研究所）

第31回「日本語の中の外来語と外国語 ～ 新聞，テレビ，J-Pop」

大学からお二人の先生をお迎えして，「ことばを量る」という視点から話題を提供していただきます。

日　時：2007年３月24日（土）
午後１時30分（１時開場）～４時30分
場　所：キャンパスプラザ京都（京都駅前）
４階　第３講義室（定員170名）
共　催：同志社大学

「新聞の中の外来語・外国語」
橋本和佳（同志社大学）
「テレビの単語使用 ── 外来語を中心に ──」
石井正彦（大阪大学）
「J-pop の中の外来語・外国語」
伊藤雅光（国立国語研究所）



・入場無料・事前申し込み制。定員になり次第，締め切ります。
・手話通訳を御希望の方は，開催日の１週間前までに御連絡ください。
【申し込み方法】　氏名・連絡先・参加希望の回を下記まで御連絡ください。
国立国語研究所「ことば」フォーラム係
TEL：042－540－4300㈹　FAX：042－540－4456　E-mail：forum@kokken.go.jp
国立国語研究所のホームページ（http://www.kokken.go.jp）からも，申し込みができます。

©2007　国立国語研究所